

6-7 海域生態系（海域生物）

6-7-1 現況調査

(1) 既存資料調査

① 海域生物

ア 調査地域

対象事業計画地周辺海域とした。

イ 調査地点

調査地域内の6地点とした。(図6-7-1.1)

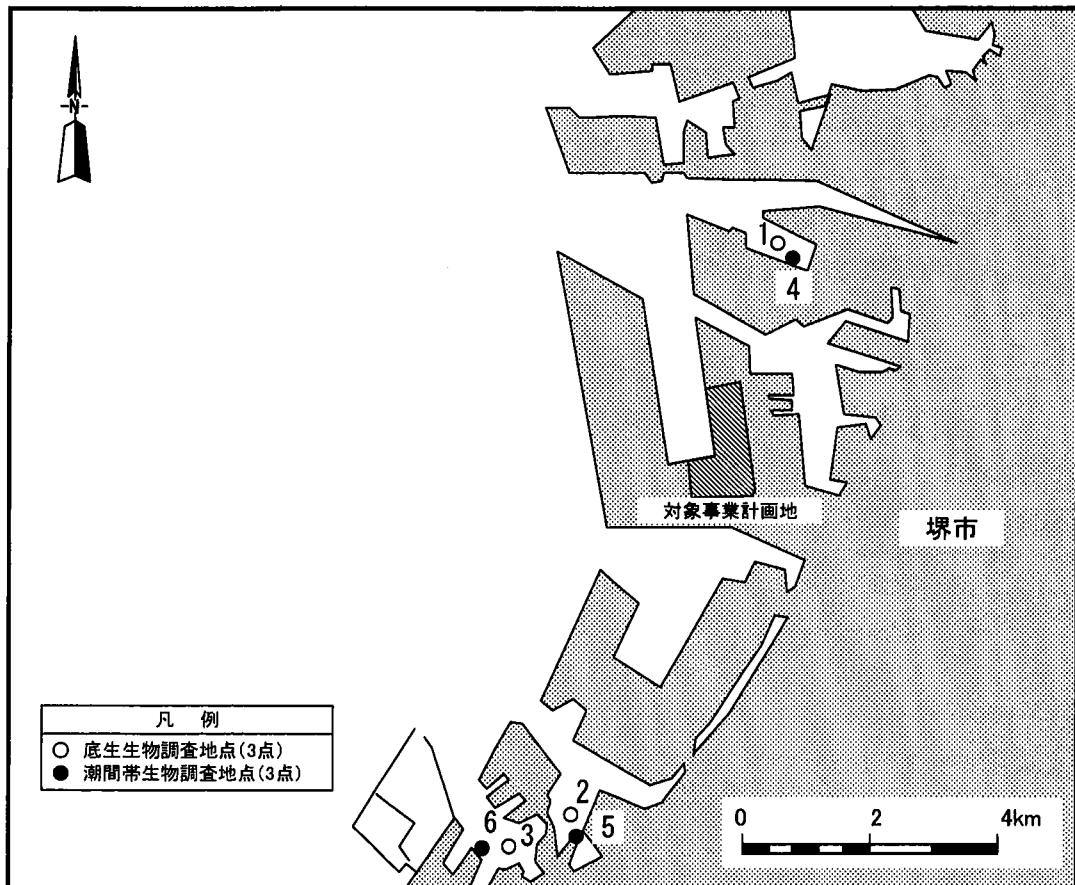


図6-7-1.1 海域生物の調査地点

ウ 調査時期

入手可能な最新資料について調査を行った。

エ 調査結果

(7) 底生生物

調査結果は表6-7-1.1に示すとおりである。

底生生物の総種類数は0～18種類、平均個体数は0～840個体/m²であり、夏季には底生生物は確認されなかった。主な出現種は、春季がシズクガイ及びイトゴカイ科、秋季及び冬季はスピオ科A型及びイトゴカイ科である。

表6-7-1.1 底生生物の調査結果

調査時期		春 季	夏 季	秋 季	冬 季
		平成 17 年 5 月 25 日	平成 17 年 8 月 2 日	平成 16 年 11 月 11 日	平成 17 年 1 月 13 日
総種類数	軟体動物門	6	0	0	1
	環形動物門	10	0	3	12
	節足動物門	1	0	1	0
	その他	1	0	0	0
	合 計	18	0	4	13
平均個体数 (個体/m ²)	軟体動物門	518	0	0	5
	環形動物門	312	0	64	475
	節足動物門	5	0	5	0
	その他	5	0	0	0
	合 計	840	0	69	480
主な出現種 個体数 (組成比 : %)		シズクガイ 464 (55.2) イトゴカイ科 193 (23.0)	出現なし	スピオ科 A 型 49 (71.0) イトゴカイ科 10 (14.5)	イトゴカイ科 267 (55.6) スピオ科 A 型 45 (18.5)

注：主な出現種は、各調査地点の上位5種（ただし、組成比率10%以上）を示す。

出典：「堺泉北港港湾計画資料（その2）－改訂－」（堺泉北港港湾管理者、平成18年）

(イ) 潮間帯生物

a 動物

調査結果は表6-7-1.2(1)、(2)に示すとおりである。

潮間帯生物(動物)の総種類数は、調査点4では18~43種類、調査点5では45~68種類、調査点6では66~94種類である。平均個体数は調査点4では738~12,647個体/0.1m²、調査点5では1,909~18,888個体/0.1m²、調査点6では3,086~104,597個体/0.1m²である。

主な出現種は、調査点4ではコウロエンカワヒバリ等、調査点5ではタテジマフジツボ等、調査点6ではイソギンチャク目等である。

表6-7-1.2(1) 潮間帯生物(動物)の枠取り調査結果

調査点4

項目		調査時期			
		春季 平成17年5月25日	夏季 平成17年8月2日	秋季 平成16年11月11日	冬季 平成17年1月13日
総種類数	軟体動物門	9	8	5	5
	環形動物門	12	8	2	4
	節足動物門	14	11	7	9
	その他	8	6	4	2
	合計	43	33	18	20
平均個体数 (個体 /0.1m ²)	軟体動物門	4,792	2,079	469	888
	環形動物門	115	1,019	26	19
	節足動物門	3,800	1,611	230	796
	その他	252	7,937	14	47
	合計	8,959	12,647	738	1,750
主な出現種 個体数(組成比:%)		ムラサキイガイ 3,249(36.2) ヨーロッパフジツボ 2,477(27.6) コウロエンカワヒバリ 1,493(16.7)	<i>Phoronis</i> sp. (筍虫綱) 5,781(45.7) <i>Actiniaria</i> (イソギンチャク目) 2,153(17.0)	コウロエンカワヒバリ 413(56.0) コツブムシ科 100(13.6)	コウロエンカワヒバリ 789(42.8) コツブムシ科 349(18.9) メリタヨコエビ科 215(11.7)

調査点5

項目		調査時期			
		春季 平成17年5月25日	夏季 平成17年8月2日	秋季 平成16年11月11日	冬季 平成17年1月13日
総種類数	軟体動物門	8	8	7	7
	環形動物門	19	19	18	19
	節足動物門	25	16	15	13
	その他	16	13	7	6
	合計	68	56	47	45
平均個体数 (個体 /0.1m ²)	軟体動物門	6,887	1,692	32	24
	環形動物門	2,093	1,222	1,514	1,109
	節足動物門	4,420	2,905	204	480
	その他	5,449	10,705	181	296
	合計	18,888	16,525	1,931	1,909
主な出現種 個体数(組成比:%)		ムラサキイガイ 5,996(31.6) 筍虫綱 4,565(24.2) カマキリヨコエビ科 2,304(12.2)	<i>Phoronis</i> sp. (筍虫綱) 9,818(59.4) タテジマフジツボ 2,389(14.5)	カサネカンザシゴカイ 1,067(55.3)	エゾカサネカンザシゴカイ 817(42.8) タテジマフジツボ 436(22.8)

注: 主な出現種は、各調査地点の上位5種(ただし、組成比率10%以上)を示す。

出典: 「堺泉北港港湾計画資料(その2) -改訂-」(堺泉北港港湾管理者、平成18年)

表6-7-1.2(2) 潮間帯生物（動物）の枠取り調査結果

調査点 6

項目		調査時期			
		春季 平成17年5月25日	夏季 平成17年8月2日	秋季 平成16年11月11日	冬季 平成17年1月13日
総種類数	軟体動物門	18	21	15	18
	環形動物門	24	23	19	19
	節足動物門	23	33	27	21
	その他	14	17	8	8
	合計	79	94	69	66
平均個体数 (個体 /0.1m ²)	軟体動物門	38,528	12,087	124	215
	環形動物門	21,846	38,914	3,550	1,179
	節足動物門	12,628	2,794	1,018	1,027
	その他	30,920	50,803	231	665
	合計	103,922	104,597	4,922	3,086
主な出現種 個体数(組成比:%)		ムラサキガイ 36,219(34.9) イソギンチャク目 13,059(12.5) 箒虫綱 12,459(12.0)	イソギンチャク目 39,714(38.0) <i>Dodeaacteria</i> sp. (ミズヒキゴカイ 科) 24,950(23.9)	カサネカンザシゴ カイ 3,029(61.5) イワフジツボ 829(16.8)	ドロクダムシ科 496(16.1) エゾカサネカンザ シゴカイ 455(14.7) イソギンチャク目 396(12.8)

注：主な出現種は、各調査地点の上位5種（ただし、組成比率10%以上）を示す。

出典：「堺泉北港湾計画資料（その2）－改訂－」（堺泉北港湾管理者、平成18年）

b 植物

調査結果は表6-7-1.3に示すとおりであり、各調査点とも年間を通じての潮間帯生物（植物）の出現は種類数、湿重量ともにわずかである。

主な出現種はアオサ属、アオノリ属、藍藻綱である。

表6-7-1.3 潮間帯生物（植物）の調査結果（採取り調査）

調査点 4

項目		調査時期		春季	夏季	秋季	冬季
				平成 17 年 5 月 25 日	平成 17 年 8 月 2 日	平成 16 年 11 月 11 日	平成 17 年 1 月 13 日
総種類数	緑藻植物門			0	2	0	0
	褐藻植物門			0	0	0	0
	紅藻植物門			0	1	0	0
	その他			0	1	1	1
	合計			0	4	1	1
平均湿重量 (g/0.1m ²)	緑藻植物門			0	+	0	0
	褐藻植物門			0	0	0	0
	紅藻植物門			0	+	0	0
	その他			0	+	0.01	0.03
	合計			0	+	0.01	0.03
主な出現種 湿重量（組成比：％）				出現なし		藍藻綱 0.01(100.0)	出現なし

調査点 5

項目		調査時期		春季	夏季	秋季	冬季
				平成 17 年 5 月 25 日	平成 17 年 8 月 2 日	平成 16 年 11 月 11 日	平成 17 年 1 月 13 日
総種類数	緑藻植物門			2	2	1	0
	褐藻植物門			0	0	0	0
	紅藻植物門			0	0	0	0
	その他			0	1	0	0
	合計			2	3	1	0
平均湿重量 (g/0.1m ²)	緑藻植物門			0.10	0.64	+	0
	褐藻植物門			0	0	0	0
	紅藻植物門			0	0	0	0
	その他			0	0.14	0	0
	合計			0.10	0.78	+	0
主な出現種 湿重量（組成比：％）				アオノリ属 0.09(90.0) アオサ属 0.01(10.0)	アオサ属 0.64(82.1) 藍藻綱 0.14(17.9)	アオサ属 +(100.0)	出現なし

調査点 6

項目		調査時期		春季	夏季	秋季	冬季
				平成 17 年 5 月 25 日	平成 17 年 8 月 2 日	平成 16 年 11 月 11 日	平成 17 年 1 月 13 日
総種類数	緑藻植物門			2	3	0	0
	褐藻植物門			0	0	0	0
	紅藻植物門			0	0	0	0
	その他			0	1	0	0
	合計			2	4	0	0
平均湿重量 (g/0.1m ²)	緑藻植物門			0.07	+	0	0
	褐藻植物門			0	0	0	0
	紅藻植物門			0	0	0	0
	その他			0	+	0	0
	合計			0.07	+	0	0
主な出現種 湿重量（組成比：％）				アオノリ属 0.06(85.7) アオサ属 0.01(14.3)		出現なし	出現なし

注：1. 主な出現種は、各調査地点の上位5種（ただし、組成比率5%以上）を示す。

2. 「+」は0.01g未満を示す。

出典：「堺泉北港港湾計画資料（その2）－改訂－」（堺泉北港港湾管理者、平成18年）

(2) 現地調査

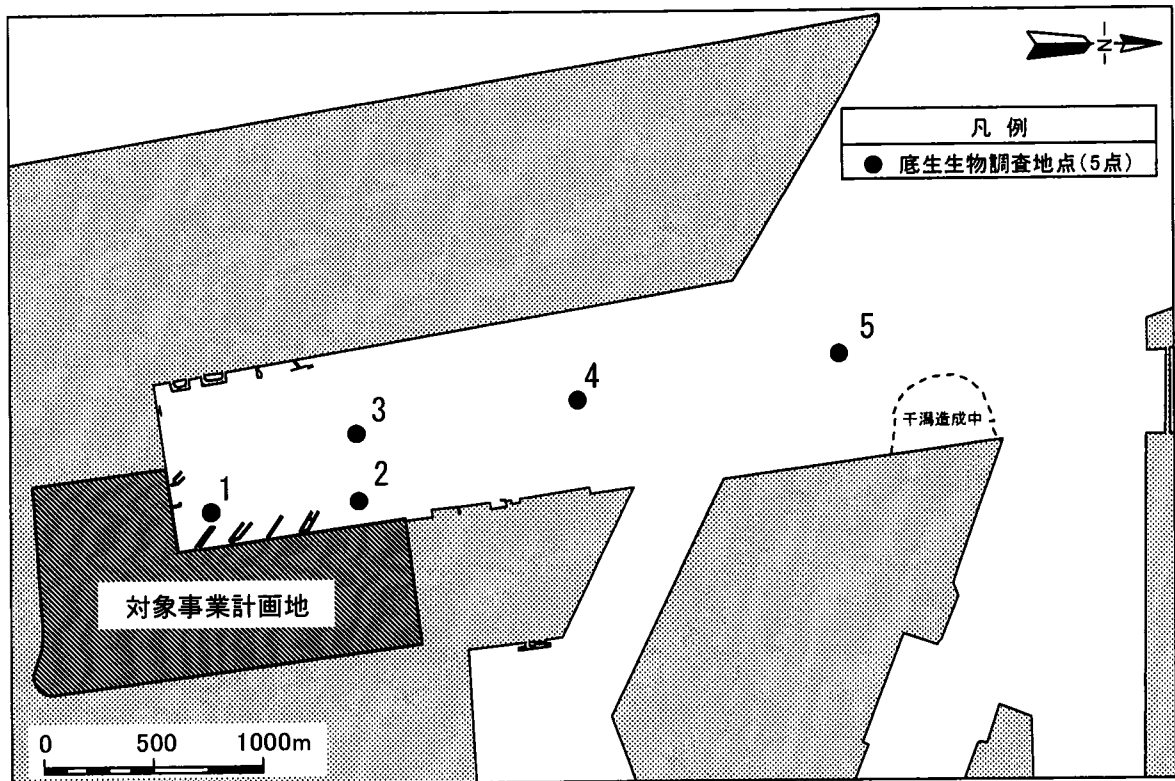
① 海域生物（底生生物）

ア 調査地域

対象事業計画地周辺海域とした。

イ 調査地点

調査地域内の5地点とした。(図6-7-1.2)



注：調査地点2は栈橋設置水域の近傍である。

図6-7-1.2 現地調査地点

ウ 調査時期

以下のとおりとした。

- ・春季：平成18年 5月15日
- ・夏季：平成18年 8月 9日
- ・秋季：平成18年11月 5日
- ・冬季：平成18年 2月13日

エ 調査方法

スミス・マッキンタイヤ型採泥器（採泥面積 0.05m^2 ）を用いて1調査点につき海底泥を3回採取し、これを混合して試料とした。採取した試料は、1mm目のふるいにかけてふるい上に残った底生生物を採集し、種の同定・計数を行った。

オ 調査結果

底生生物の調査結果は表6-7-1.4及び図6-7-1.3(1)、(2)に示すとおりである。

総出現種類数は四季を通じて30種であり、春季が17種、夏季が13種、秋季が8種、冬季が15種である。平均個体数は春季が923個体/m²、夏季が442個体/m²、秋季が1,712個体/m²、冬季が3,513個体/m²である。主な出現種は春季がヨツバネスピオ（A型）（83.7%）、カタマガリギボシイソメ（5.8%）、夏季がヨツバネスピオ（A型）（70.7%）、カタマガリギボシイソメ（9.4%）、シズクガイ（6.3%）、秋季がヨツバネスピオ（A型）（94.9%）、冬季がヨツバネスピオ（A型）（94.5%）である。

表 6-7-1.4 底生生物の調査結果

調査時期		春季	夏季	秋季	冬季
		平成 18 年 5 月 15 日	平成 18 年 8 月 9 日	平成 18 年 11 月 5 日	平成 18 年 2 月 13 日
出現種類数	軟体動物門	2	2	0	3
	環形動物門	11	8	6	11
	節足動物門	1	0	1	0
	その他	3	3	1	1
	合計 [30]	17	13	8	15
平均個体数 (個体/m ²)	軟体動物門	13	35	0	9
	環形動物門	880	384	1,708	3,497
	節足動物門	3	0	3	0
	その他	27	23	1	7
	合計	923	442	1,712	3,513
主な出現種 (組成比：%)	軟体動物門		シズクガイ (6.3)		
	環形動物門	ヨツバネスピオ (A型) (83.7) カタマガリギボシ イソメ (5.8)	ヨツバネスピオ (A型) (70.7) カタマガリギボシ イソメ (9.4)	ヨツバネスピオ (A型) (94.9)	ヨツバネスピオ (A型) (94.5)

注：1. 出現種類数の合計欄の [] 内の数値は、四季を通じての総出現種類数を示す。

2. 主な出現種は、組成比率5%以上の種を示す。

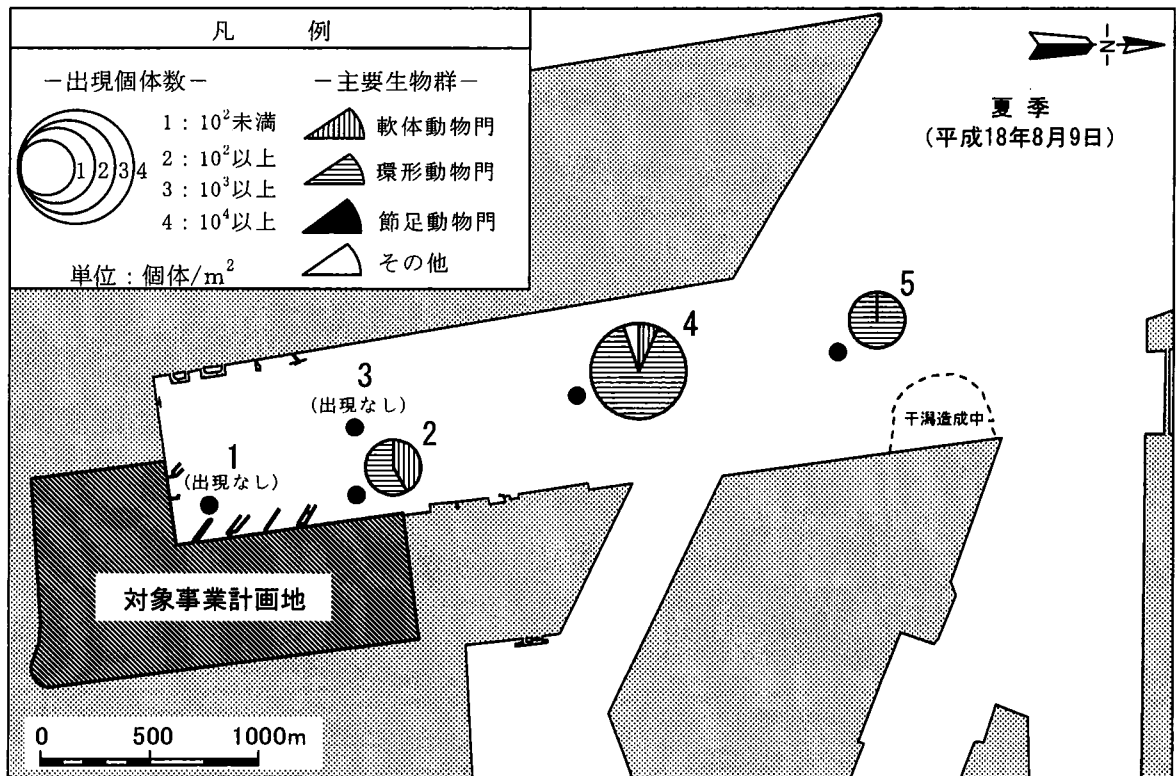
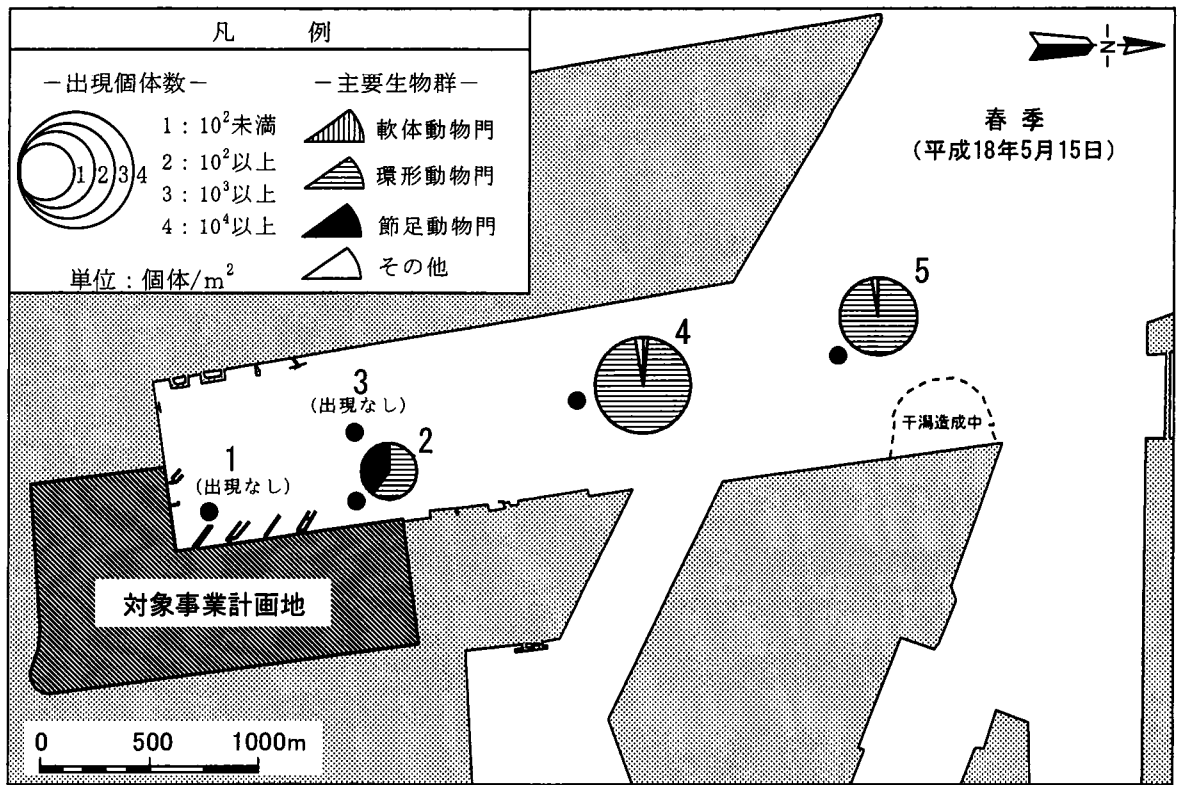


図6-7-1.3(1) 底生生物の水平分布

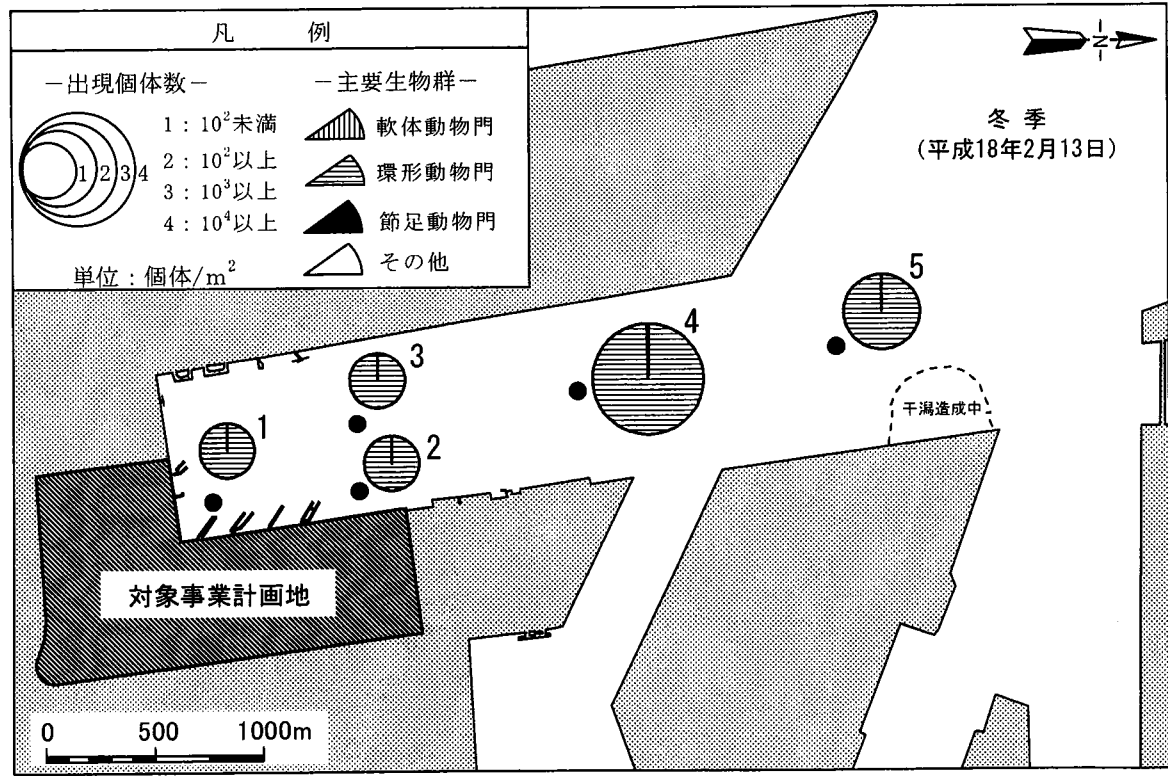
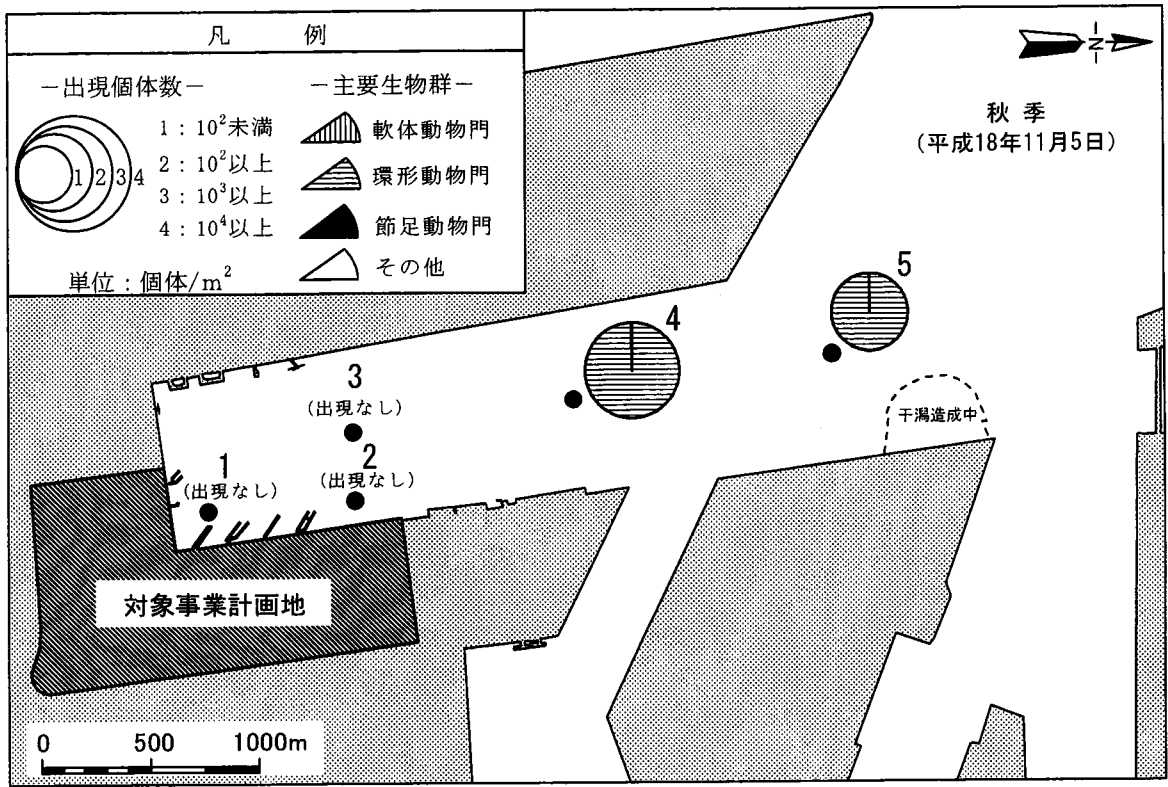


図6-7-1.3(2) 底生生物の水平分布

② 海域生物（潮間帯生物）

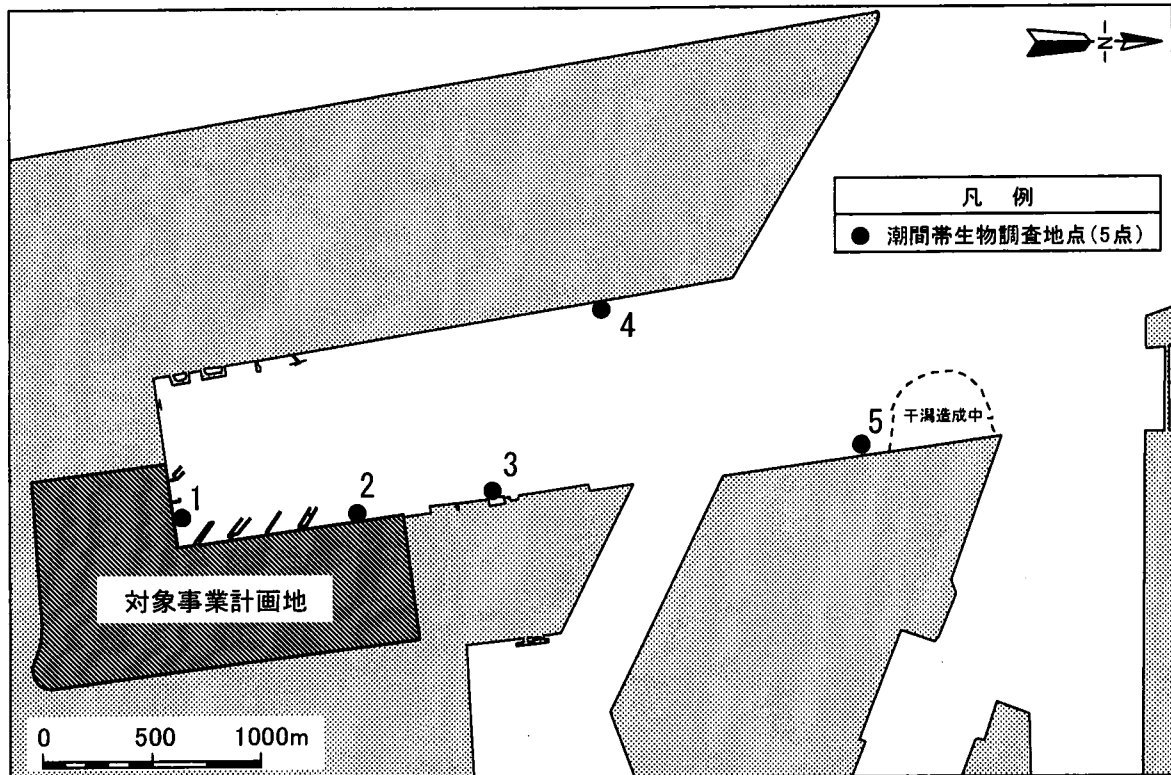
ア 調査地域

対象事業計画地周辺海域とした。

イ 調査地点

調査地域内の5地点とした。（図6-7-1.4）

調査地点の断面模式図は、図6-7-1.5(1)、(2)に示すとおりである。



注：調査地点2は栈橋設置水域の近傍である。

図6-7-1.4 現地調査地点

ウ 調査時期

以下のとおりとした。

- ・ 春季：平成18年 5月17日、18日
- ・ 夏季：平成18年 8月12日、13日
- ・ 秋季：平成18年11月 8日、 9日
- ・ 冬季：平成18年 2月17日、18日

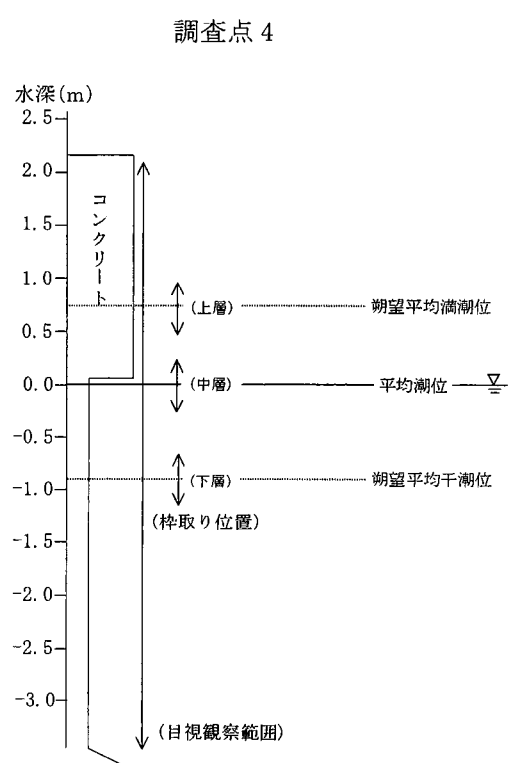
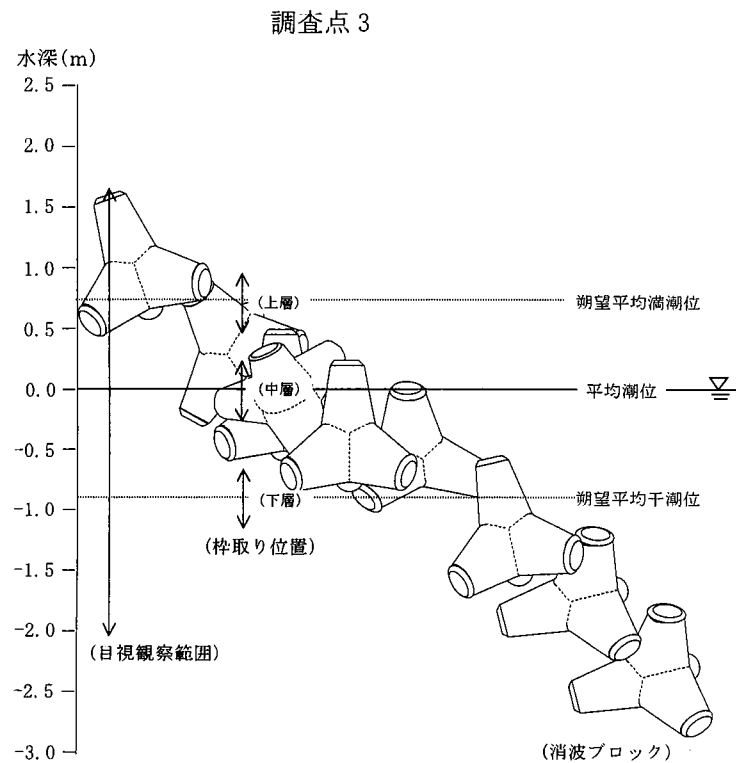
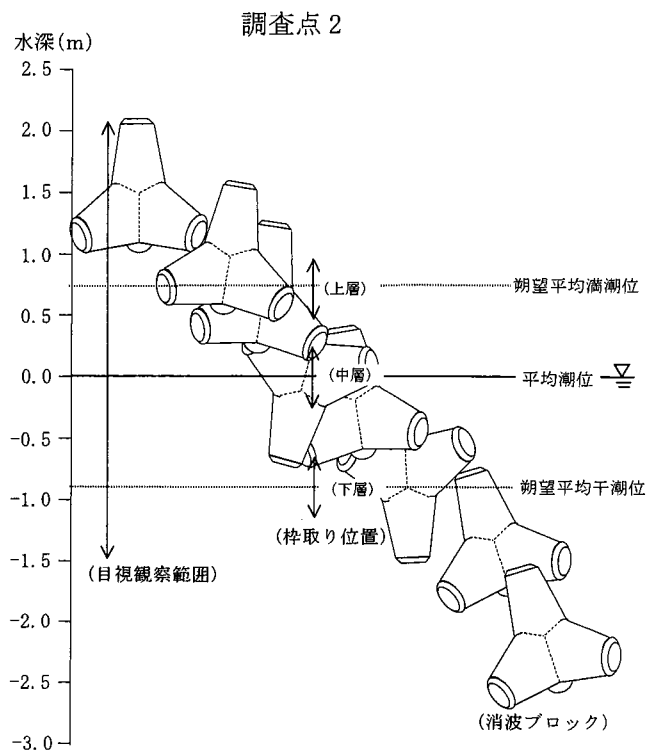
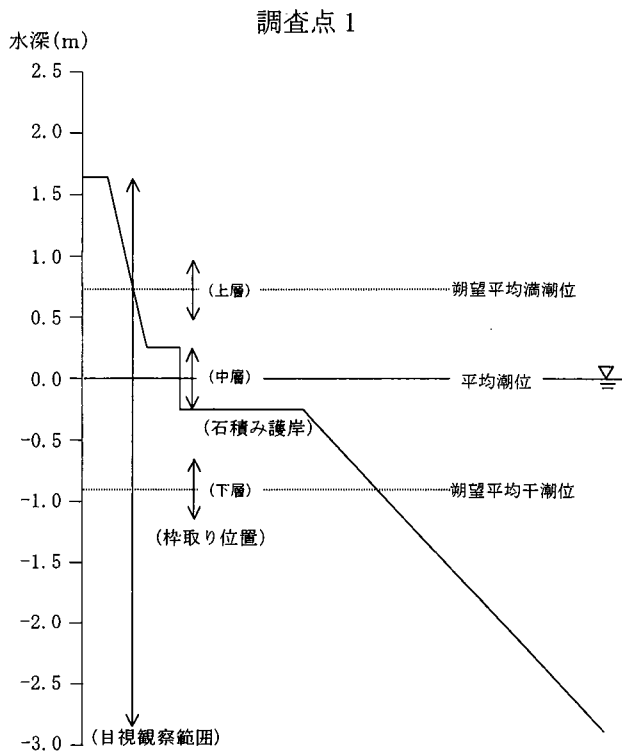


図6-7-1.5(1) 調査地点の断面模式

調査点 5

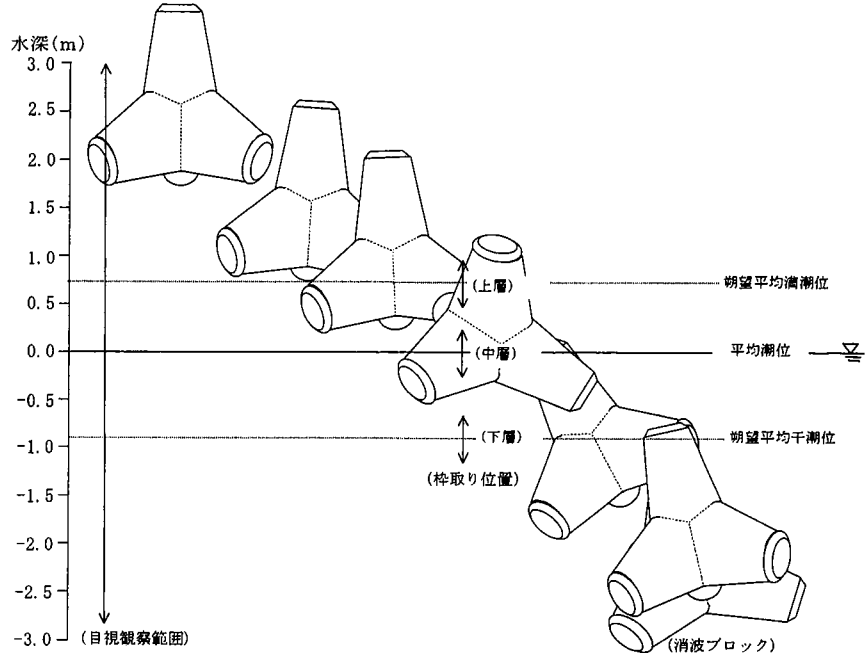


図6-7-1.5(2) 調査地点の断面模式

エ 調査方法

(7) 目視観察調査

生物の出現する飛沫帯から朔望平均干潮位付近までの間のコンクリート構造物等において、ベルトトランセクト法による目視観察調査（50cm×50cm方形枠）を行い、動物及び植物を観察した。

(イ) 採取り調査

朔望平均満潮位付近から朔望平均干潮位付近までの間のコンクリート構造物等の3箇所において、採取り法（50cm×50cm方形枠）により動物及び植物を採取し、種の同定、計数を行った。

オ 調査結果

(7) 目視観察調査

潮間帯生物（動物）の目視観察調査結果は表6-7-1.5、潮間帯生物（植物）の目視観察調査結果は表6-7-1.6に示すとおりである。

潮間帯生物（動物）の鉛直分布は図6-7-1.6(1)～(5)、潮間帯生物（植物）の鉛直分布は図6-7-1.7(1)、(2)に示すとおりである。

a 動物

総出現種類数は四季を通じて36種であり、春季が24種、夏季が24種、秋季が28種、冬季が26種である。

主な出現種は、春季がムラサキイガイ、マガキ、シオツガイ、アラレタマキビ、タテジマイソギンチャク、夏季がタマキビ、アラレタマキビ、ムラサキイガイ、マガキ、イワフジツボ、タテジマフジツボ、アメリカフジツボ、タテジマイソギンチャク、イソギンチャク目、コケムシ綱、秋季がタマキビ、アラレタマキビ、シオツガイ、タテジマイソギンチャク、イソギンチャク目、カンザシゴカイ科、ホウキムシ科、シロボヤ、冬季がタマキビ、アラレタマキビ、レイシガイ、マガキ、シオツガイ、タテジマイソギンチャク、イソギンチャク目、ホウキムシ科である。

b 植物

総出現種類数は四季を通じて11種であり、春季が6種、夏季が4種、秋季が7種、冬季が10種である。

主な出現種は、春季がアオサ属、アオノリ属、藍藻綱、夏季、秋季がシオグサ属、藍藻綱、冬季がアオサ属、アオノリ属、アマノリ属、イギス科、イトグサ属、藍藻綱である。

表6-7-1.5 潮間帯生物（動物）の目視観察調査結果

項目		調査時期		春季	夏季	秋季	冬季
		平成18年5月17,18日		平成18年8月12,13日	平成18年11月8,9日	平成18年2月17,18日	
出現種類数	総数 [36]	24		24	28	26	
	最小～最大	10～17		14～20	12～22	12～21	
主な出現種	軟体動物門	ムラサキイガイ マガキ シオツガイ アラレタマキビ		タマキビ アラレタマキビ ムラサキイガイ マガキ	タマキビ アラレタマキビ シオツガイ	タマキビ アラレタマキビ レイシガイ マガキ シオツガイ	
	節足動物門			イワフジツボ タテジマフジツボ アメリカフジツボ			
	その他	タテジマイソギン チャク		タテジマイソギン チャク イソギンチャク目 コケムシ綱	タテジマイソギン チャク イソギンチャク目 カンザシゴカイ科 ホウキムシ科 シロボヤ	タテジマイソギン チャク イソギンチャク目 ホウキムシ科	

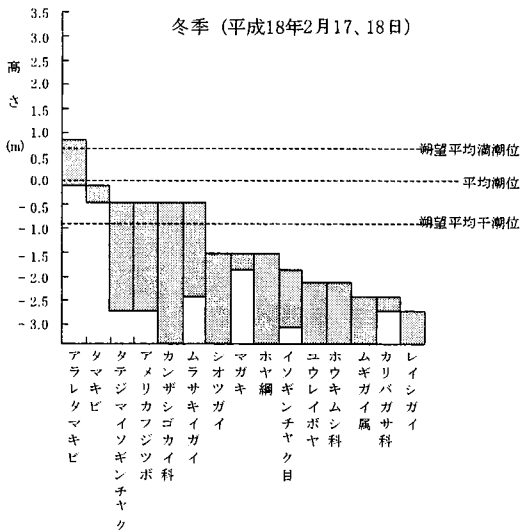
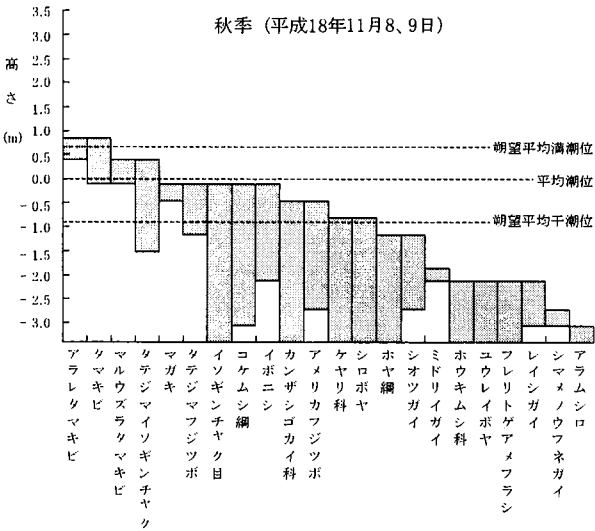
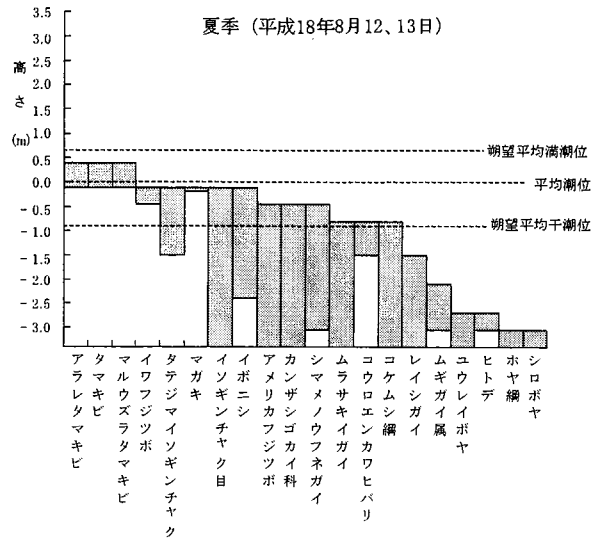
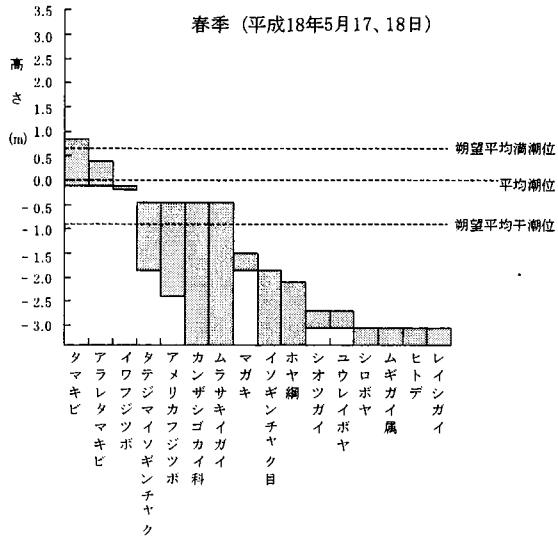
- 注：1. 表中の結果は5調査点の観察結果を示す。
 2. 出現種類数の総数欄の [] 内の数値は、四季を通じての総出現種類数を示す。
 3. 主な出現種は、4調査点以上に出現し、いずれかの観察枠で被度が30%以上又は個体数が100個体/m²以上出現したものを示す。

表6-7-1.6 潮間帯生物（植物）の目視観察調査結果

項目		調査時期		春季	夏季	秋季	冬季
		平成18年5月17,18日		平成18年8月12,13日	平成18年11月8,9日	平成18年2月17,18日	
出現種類数	総数 [11]	6		4	7	10	
	最小～最大	2～6		1～4	2～7	6～9	
主な出現種	緑藻植物門	アオサ属 アオノリ属		シオグサ属	シオグサ属	アオサ属 アオノリ属	
	紅藻植物門					アマノリ属 イギス科 イトグサ属	
	その他	藍藻綱		藍藻綱	藍藻綱	藍藻綱	

- 注：1. 表中の結果は5調査点の観察結果を示す。
 2. 出現種類数の総数欄の [] 内の数値は、四季を通じての総出現種類数を示す。
 3. 主な出現種は、4調査点以上に出現し、いずれかの観察枠で被度が10%以上出現したものを示す。

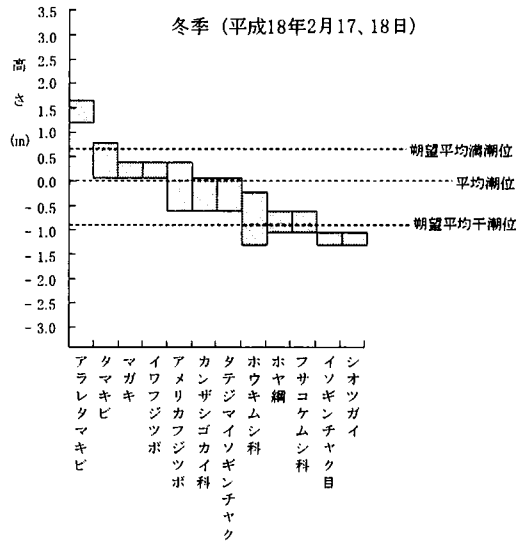
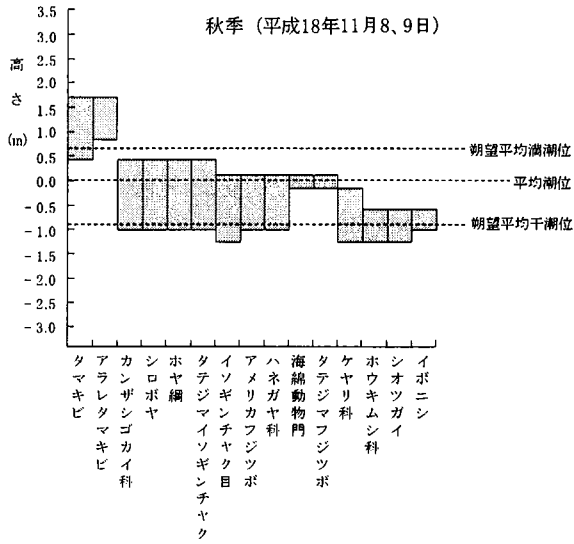
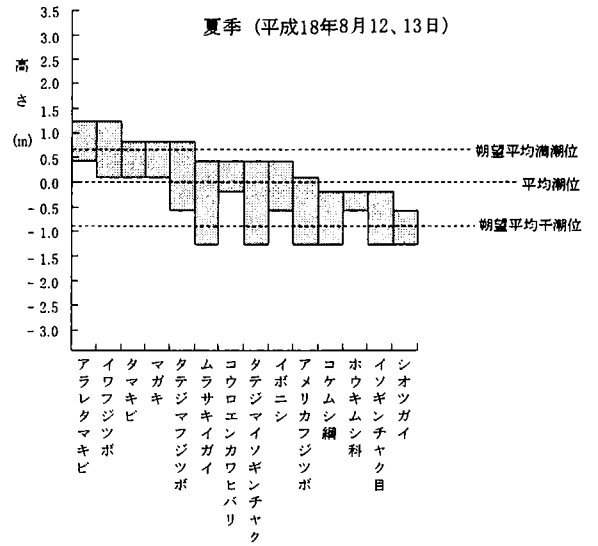
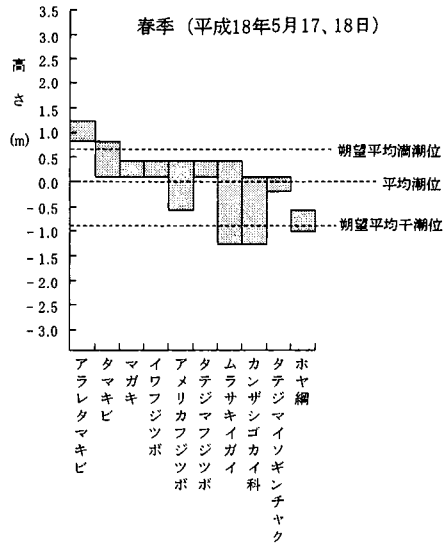
調査点 1



注：各調査時期に出現した種を記載した。

図6-7-1.6(1) 潮間帯生物（動物）の鉛直分布（目視観察調査）

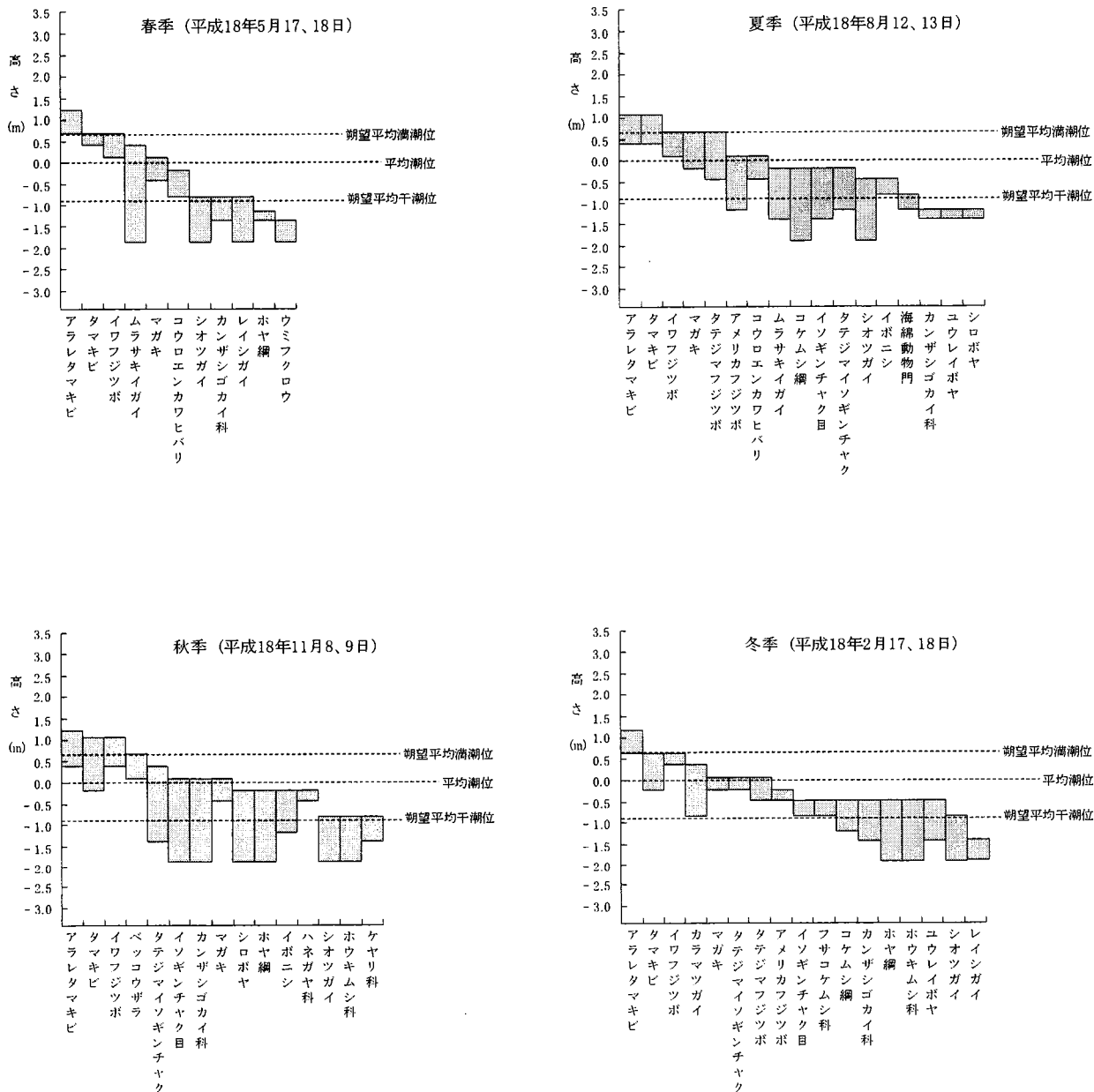
調査点 2



注：各調査時期に出現した種を記載した。

図6-7-1.6(2) 潮間帯生物(動物)の鉛直分布(目視観察調査)

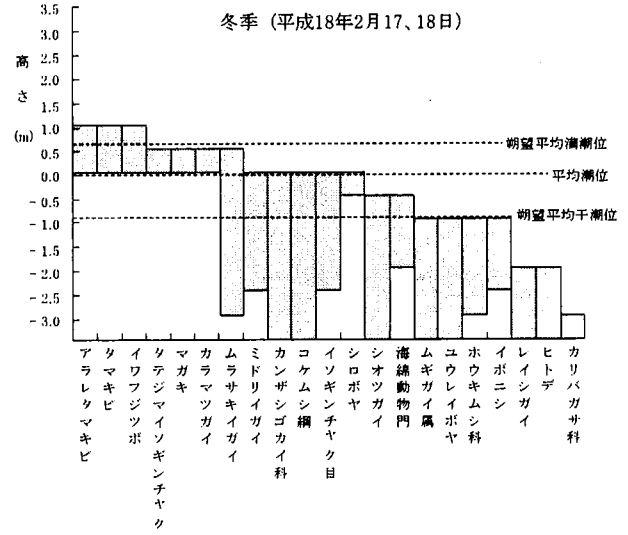
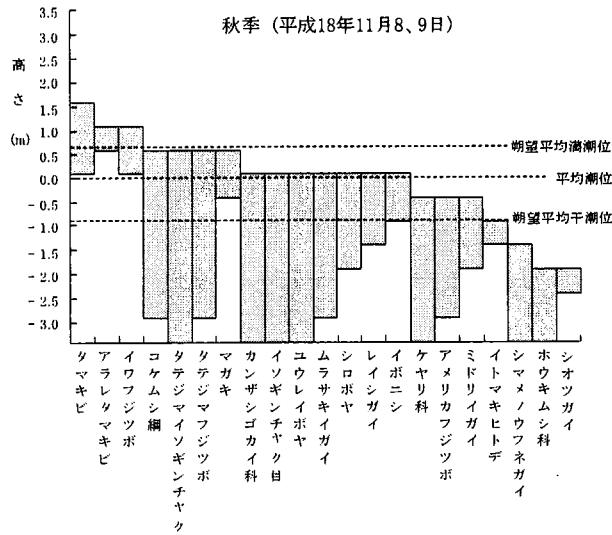
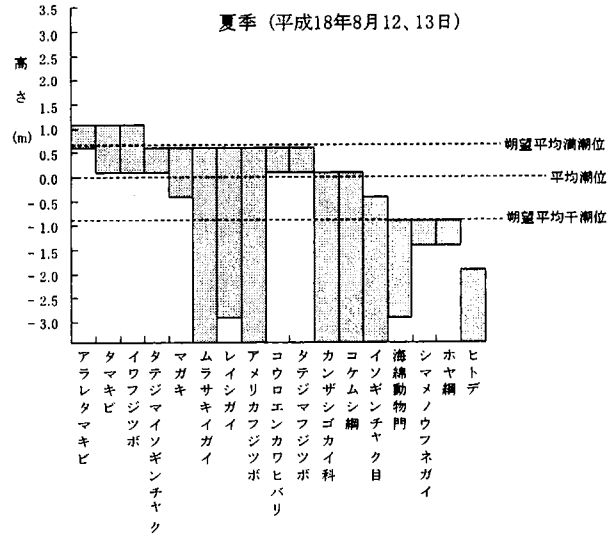
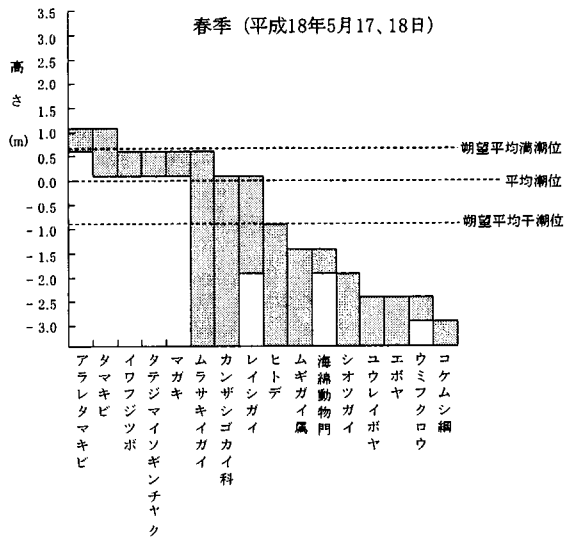
調査点 3



注：各調査時期に出現した種を記載した。

図6-7-1.6(3) 潮間帯生物（動物）の鉛直分布（目視観察調査）

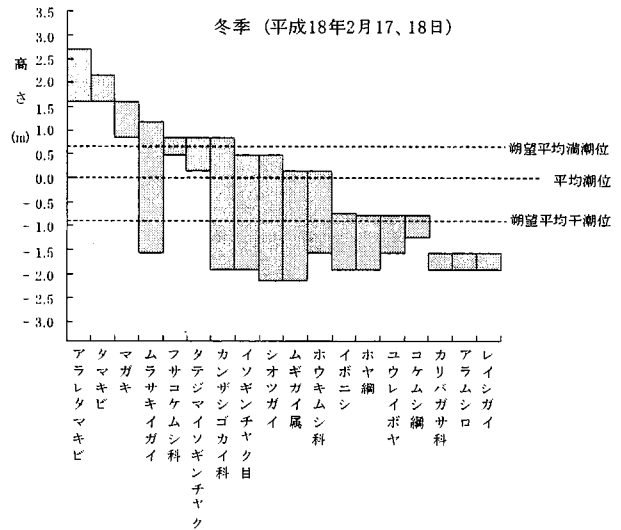
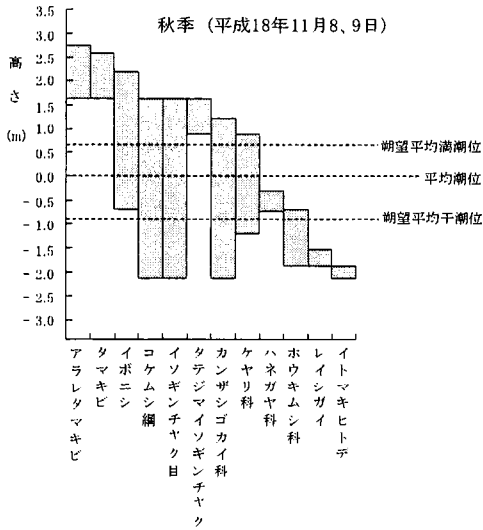
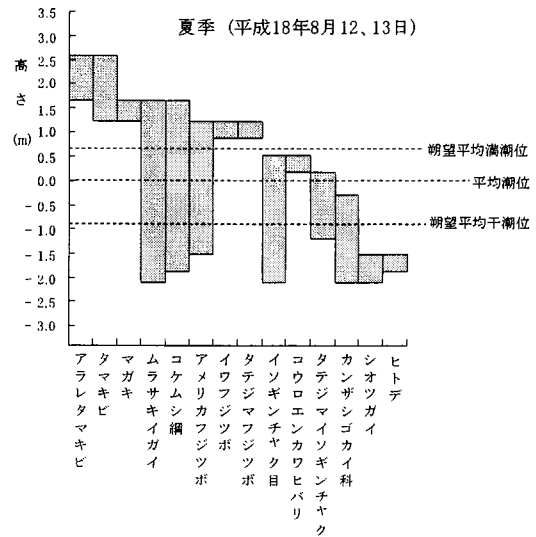
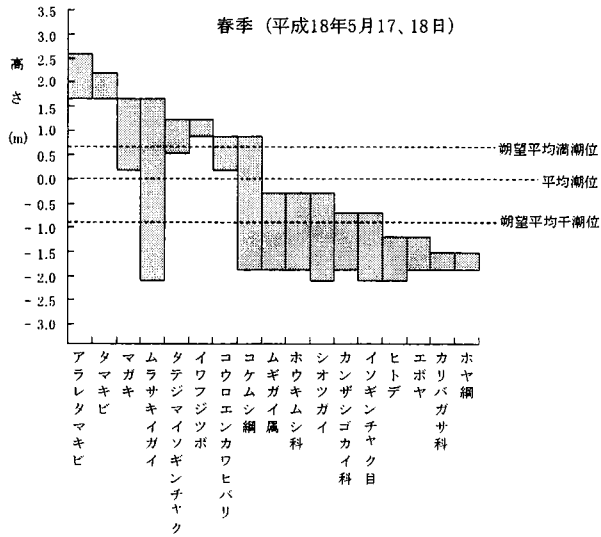
調査点 4



注：各調査時期に出現した種を記載した。

図6-7-1.6(4) 潮間帯生物（動物）の鉛直分布（目視観察調査）

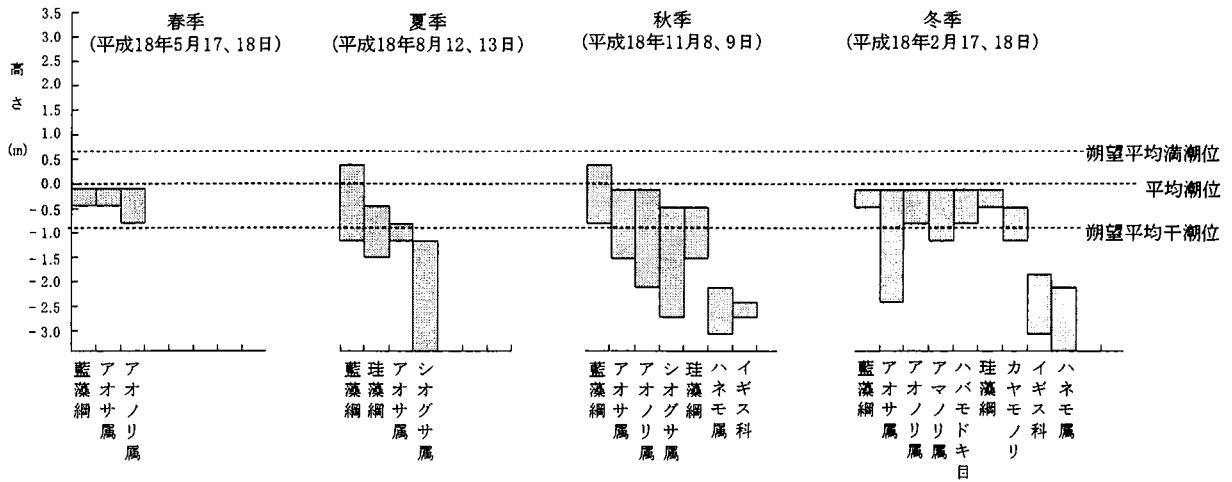
調査点 5



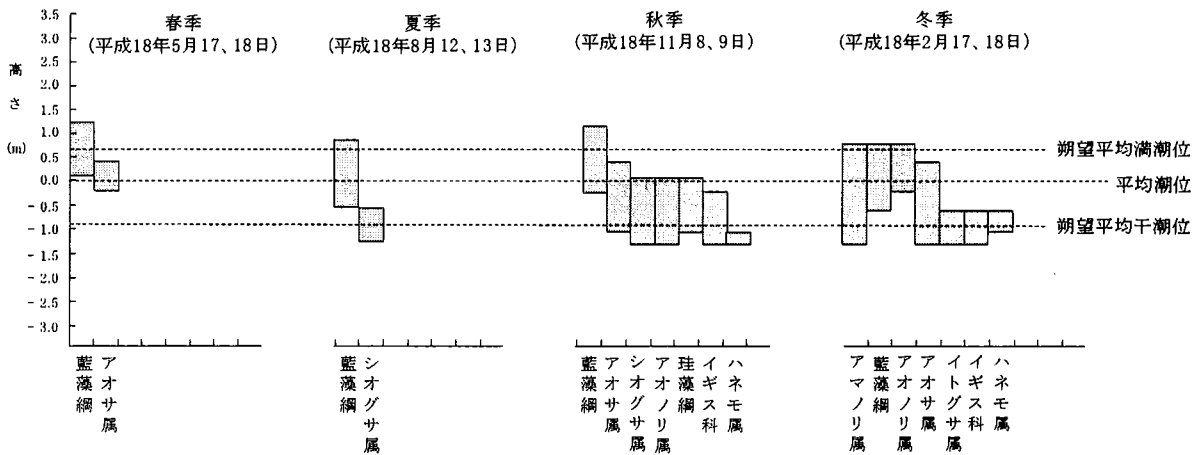
注：各調査時期に出現した種を記載した。

図6-7-1.6 (5) 潮間帯生物（動物）の鉛直分布（目視観察調査）

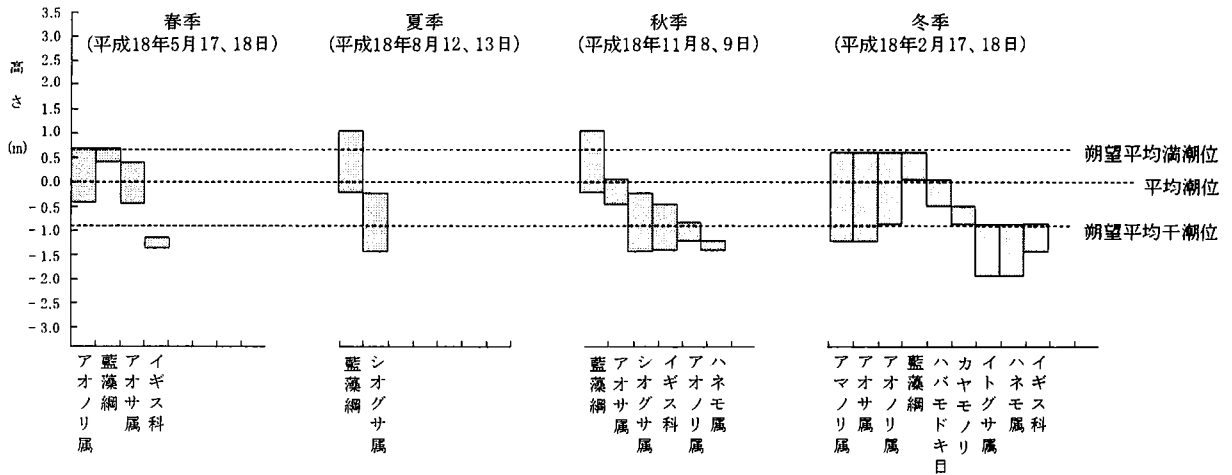
調査点 1



調査点 2



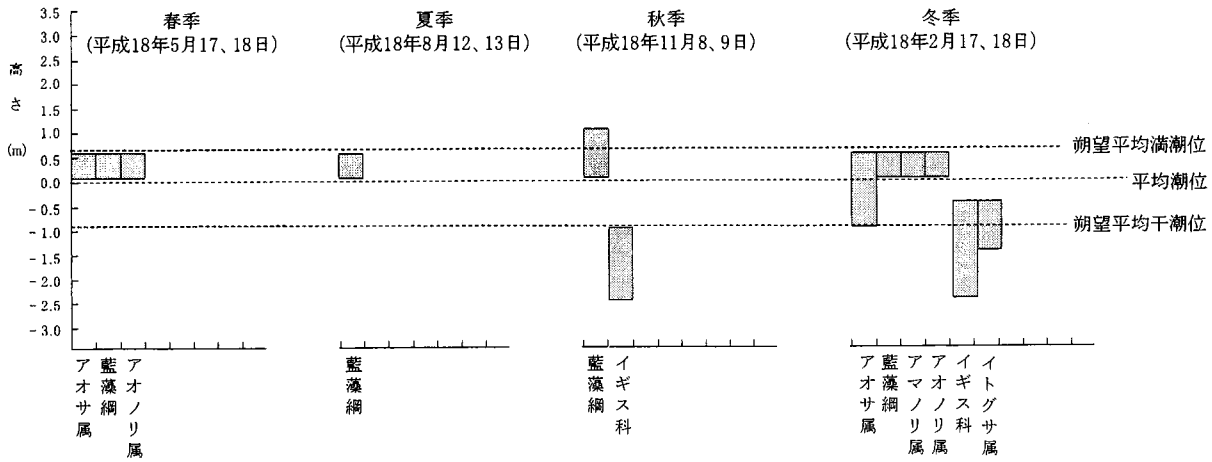
調査点 3



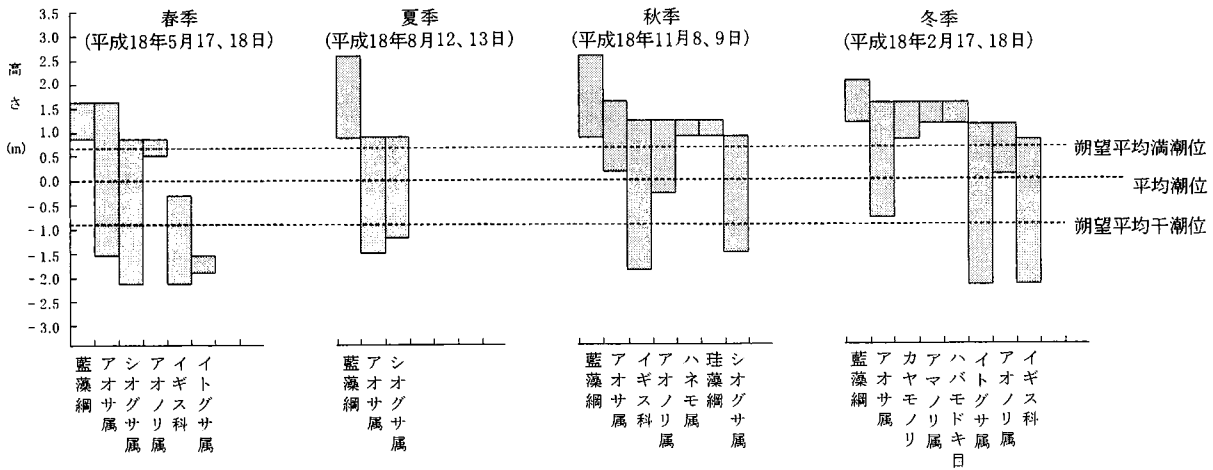
注：各調査時期に各調査点で出現した種を記載した。

図6-7-1.7(1) 潮間帯生物（植物）の鉛直分布（目視観察調査）

調査点 4



調査点 5



注：各調査時期に各調査点で出現した種を記載した。

図6-7-1.7(2) 潮間帯生物（植物）の鉛直分布（目視観察調査）

(イ) 枠取り調査

潮間帯生物（動物）の枠取り調査結果は表6-7-1.7、潮間帯生物（植物）の枠取り調査結果は表6-7-1.8に示すとおりである。

潮間帯生物（動物）の水平分布は図6-7-1.8(1)、(2)、潮間帯生物（植物）の水平分布は図6-7-1.9(1)、(2)に示すとおりである。

a 動物

総出現種類数は四季を通じて80種であり、春季が24種、夏季が37種、秋季が61種、冬季が52種である。

平均個体数は春季が9,536個体/m²、夏季が8,237個体/m²、秋季が5,547個体/m²、冬季が2,476個体/m²である。

主な出現種は、春季がムラサキイガイ (89.0%)、コウロエンカワヒバリ (5.4%)、夏季がムラサキイガイ (54.3%)、コウロエンカワヒバリ (24.0%)、秋季がイワフジツボ (45.7%)、ワレカラ属 (7.9%)、イソギンチャク目 (6.5%)、ホソトゲカンザシゴカイ (6.3%)、冬季がムラサキイガイ (43.2%)、ドロクダムシ属 (24.5%)、コウロエンカワヒバリ (12.0%) である。

b 植物

総出現種類数は四季を通じて13種であり、春季が5種、夏季が2種、秋季が5種、冬季が9種である。

平均湿重量は春季が9.0g/m²、夏季が0.7g/m²、秋季が0.4g/m²、冬季が43.3g/m²である。

主な出現種は、春季がアオノリ属 (92.3%)、アオサ属 (7.7%)、夏季がユレモ科 (100.0%)、秋季がシオグサ属 (78.6%)、フタツガサネ属 (14.3%)、アオサ属 (7.1%)、冬季がアマノリ属 (85.5%)、アオノリ属 (11.4%) である。

表6-7-1.7 潮間帯生物（動物）の枠取り調査結果

項目		調査時期			
		春季 平成18年5月17,18日	夏季 平成18年8月12,13日	秋季 平成18年11月8,9日	冬季 平成18年2月17,18日
出現種類数	軟体動物門	7	11	18	10
	環形動物門	5	11	18	19
	節足動物門	9	12	17	16
	その他	3	3	8	7
	合計[80]	24	37	61	52
平均個体数 (個体/m ²)	軟体動物門	9,111	6,613	542	1,472
	環形動物門	113	525	941	132
	節足動物門	244	978	3,479	846
	その他	68	121	585	26
	合計	9,536	8,237	5,547	2,476
主な出現種	軟体動物門	ムラサキイガイ (89.0) コウロエンカワヒ バリ (5.4)	ムラサキイガイ (54.3) コウロエンカワヒ バリ (24.0)		ムラサキイガイ (43.2) コウロエンカワヒ バリ (12.0)
	環形動物門			ホソトゲカンザシゴ カイ (6.3)	
	節足動物門			イワフジツボ (45.7) ワレカラ属 (7.9)	ドロクダムシ属 (24.5)
	その他			イソギンチャク目 (6.5)	

- 注：1. 出現種類数の合計欄の [] 内の数値は、四季を通じての総出現種類数を示す。
 2. 平均個体数は各調査点の上層、中層、下層の枠取り結果を平均し、m²に換算して示した。
 3. 主な出現種は、組成比率5%以上のものを示す。() 内の数値は、総出現個体数に対する組成比率 (%) を示す。

表6-7-1.8 潮間帯生物（植物）の枠取り調査結果

項目		調査時期			
		春季 平成18年5月17,18日	夏季 平成18年8月12,13日	秋季 平成18年11月8,9日	冬季 平成18年2月17,18日
出現種類数	緑藻植物門	2	1	3	3
	褐藻植物門	-	-	-	3
	紅藻植物門	2	-	2	2
	その他	1	1	-	1
	合計[13]	5	2	5	9
平均湿重量 (g/m ²)	緑藻植物門	9.0	0.0	0.3	6.1
	褐藻植物門	-	-	-	0.2
	紅藻植物門	0.0	-	0.1	37.0
	その他	0.0	0.7	-	0.1
	合計	9.0	0.7	0.4	43.3
主な出現種	緑藻植物門	アオサ属 (7.7) アオノリ属 (92.3)		シオグサ属 (78.6) アオサ属 (7.1)	アオノリ属 (11.4)
	紅藻植物門			フタツガサネ属 (14.3)	アマノリ属 (85.5)
	その他		ユレモ科 (100.0)		

- 注：1. 出現種類数の合計欄の [] 内の数値は、四季を通じての総出現種類数を示す。
 2. 平均湿重量は各調査点の上層、中層、下層の枠取り結果を平均し、m²に換算して示した。
 3. 主な出現種は、組成比率5%以上のものを示す。() 内の数値は、総出現湿重量に対する組成比率 (%) を示す。なお、計算上、組成比率が0.0%以下の場合、() 内の数値に反映されないことがある。

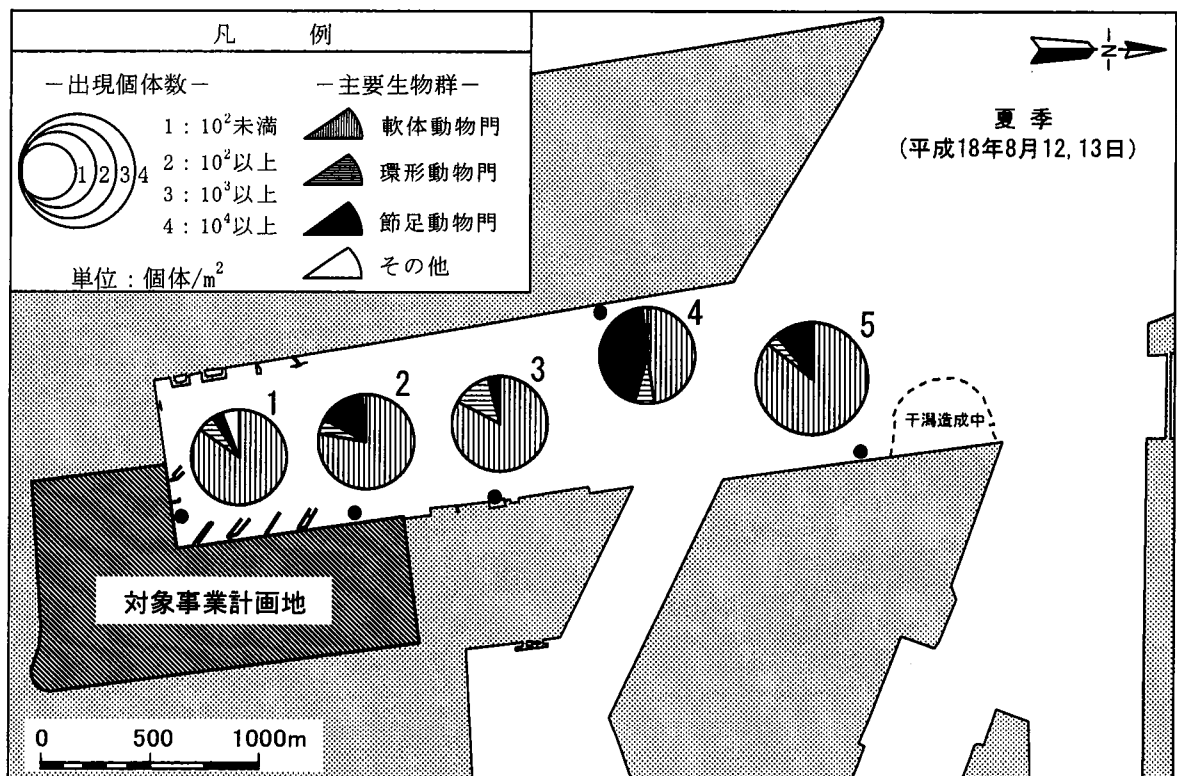
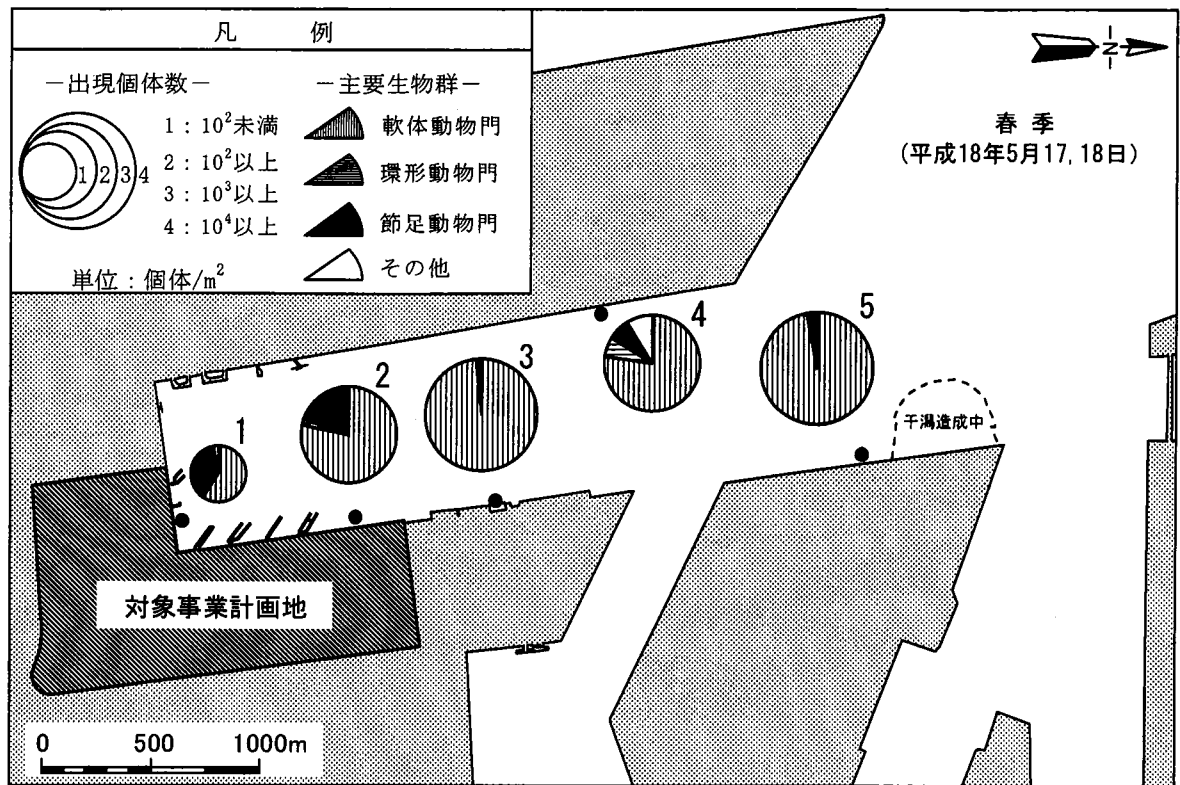


図6-7-1.8(1) 潮間帯生物(動物)の水平分布(柁取り調査)

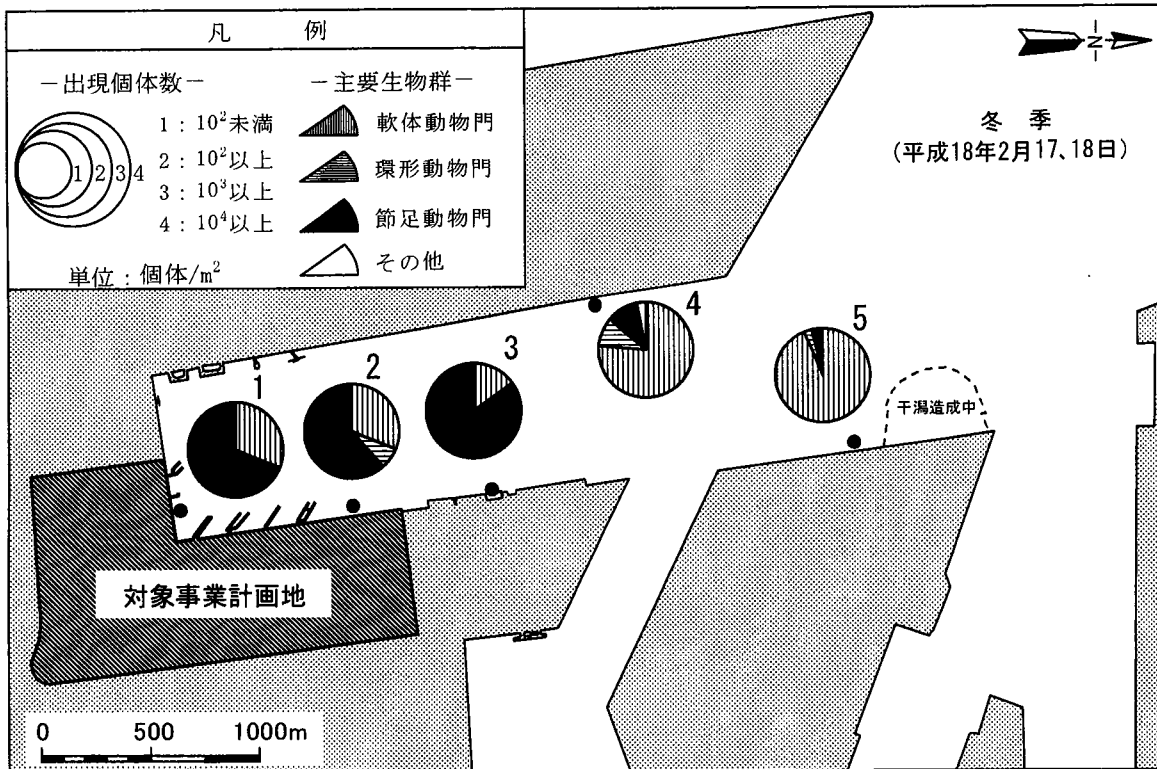
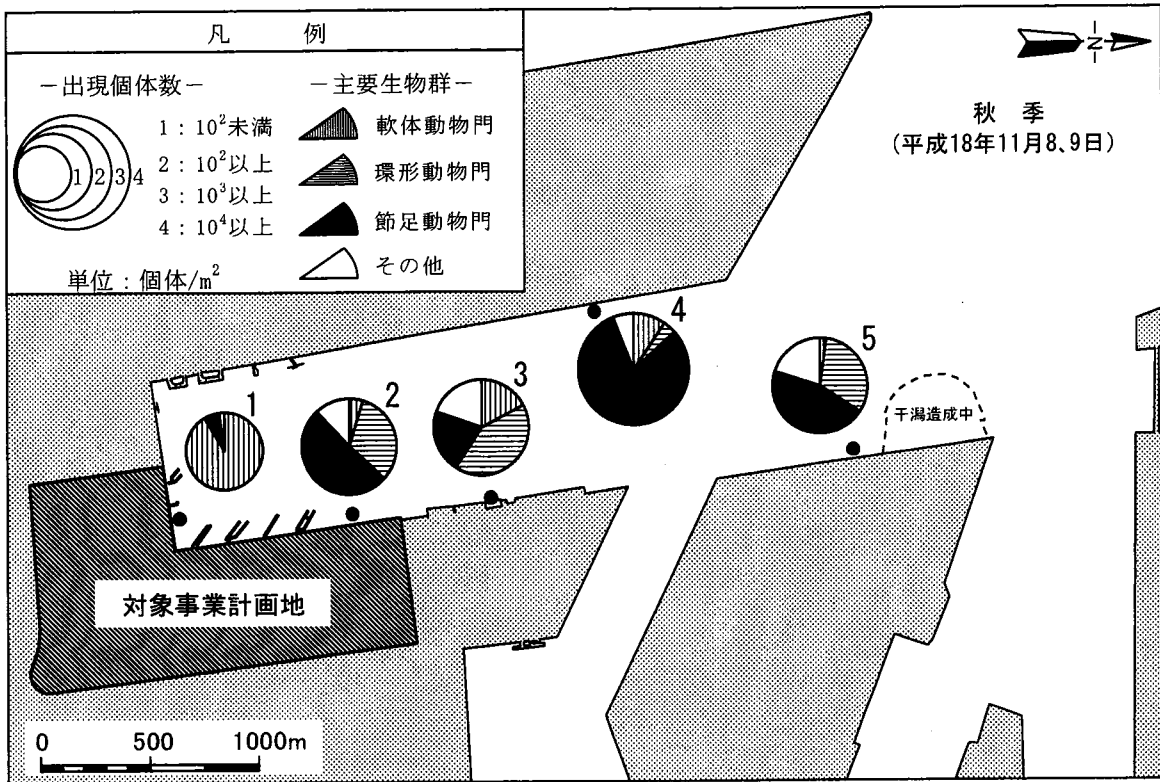


図6-7-1.8(2) 潮間帯生物(動物)の水平分布(枠取り調査)

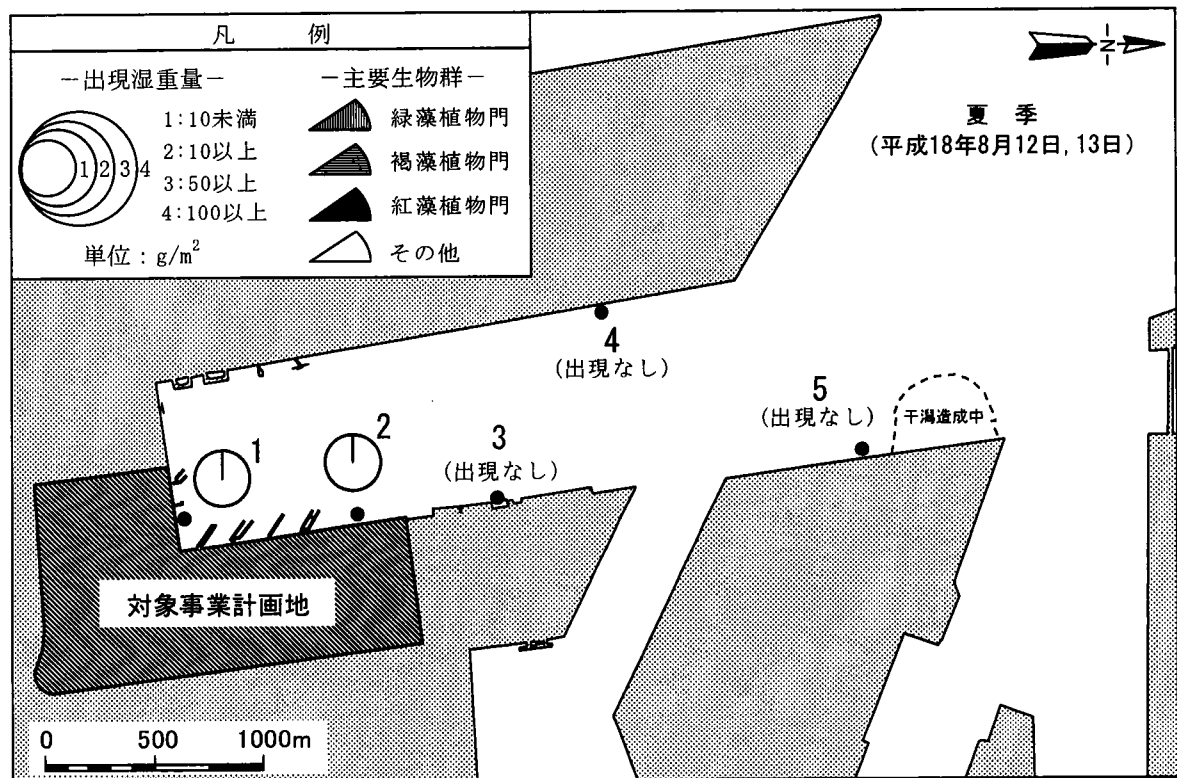
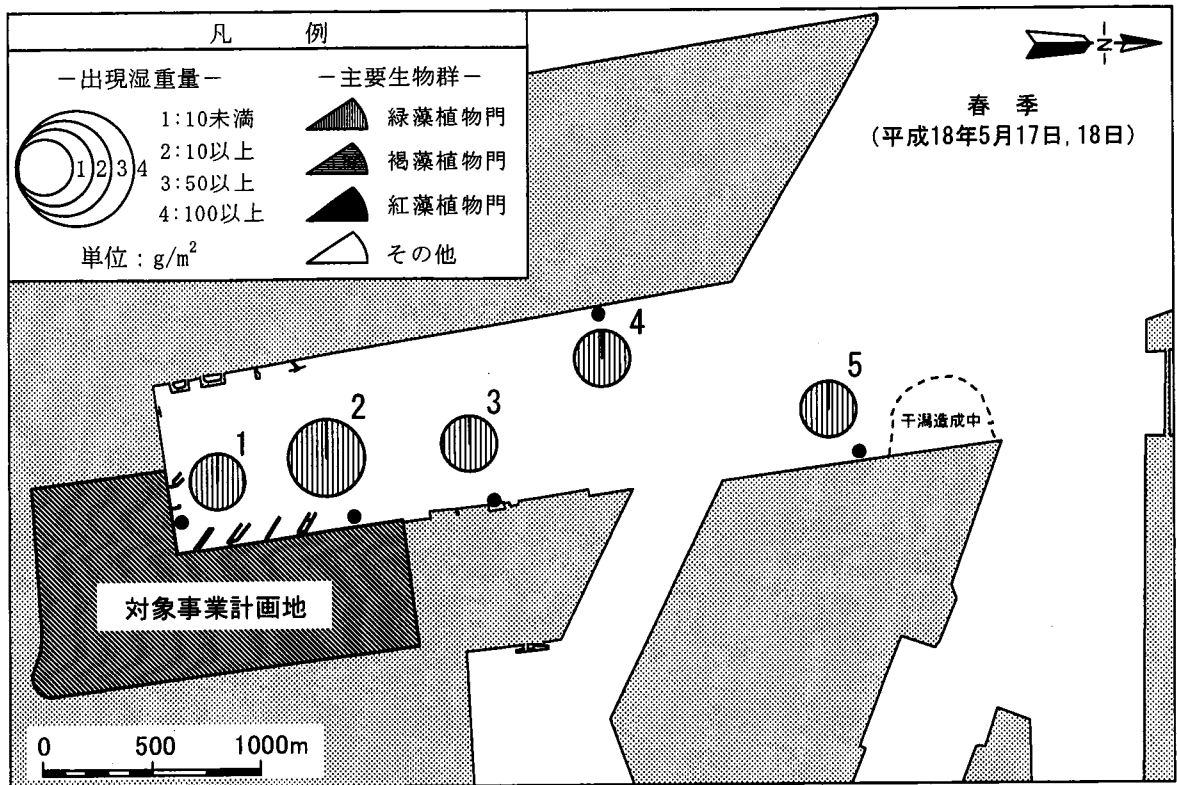


図6-7-1.9(1) 潮間帯生物(植物)の水平分布(枠取り調査)

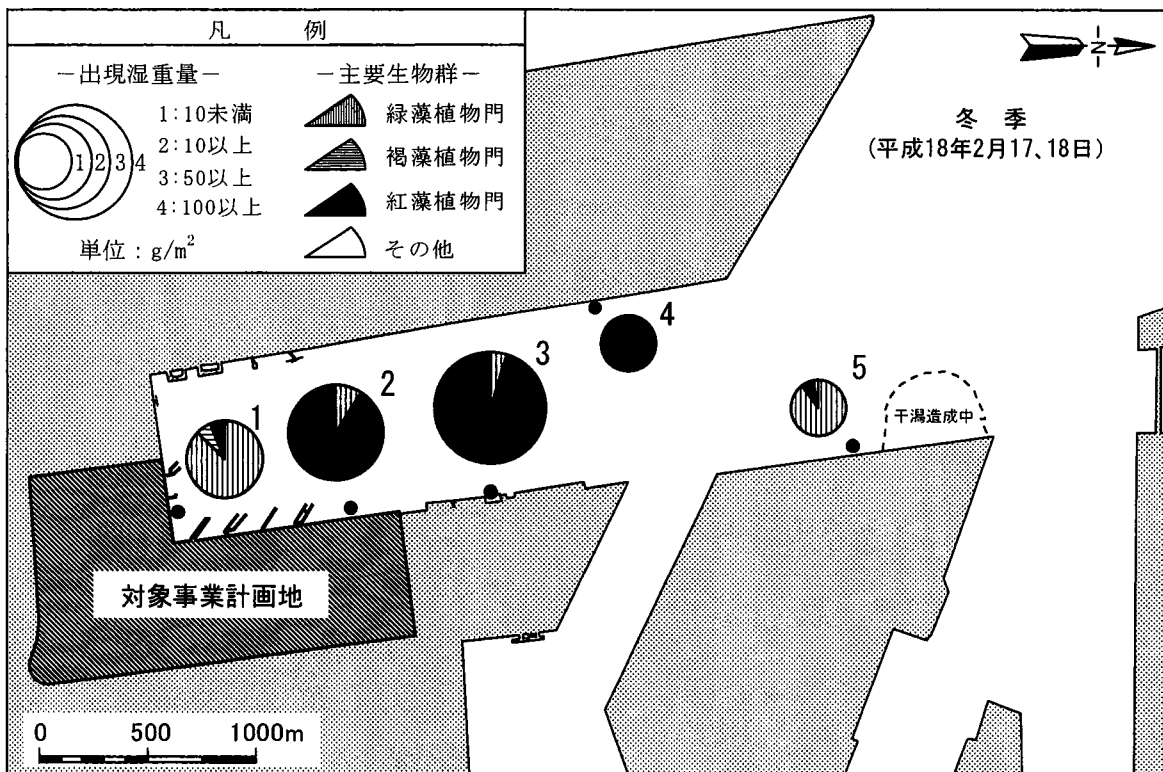
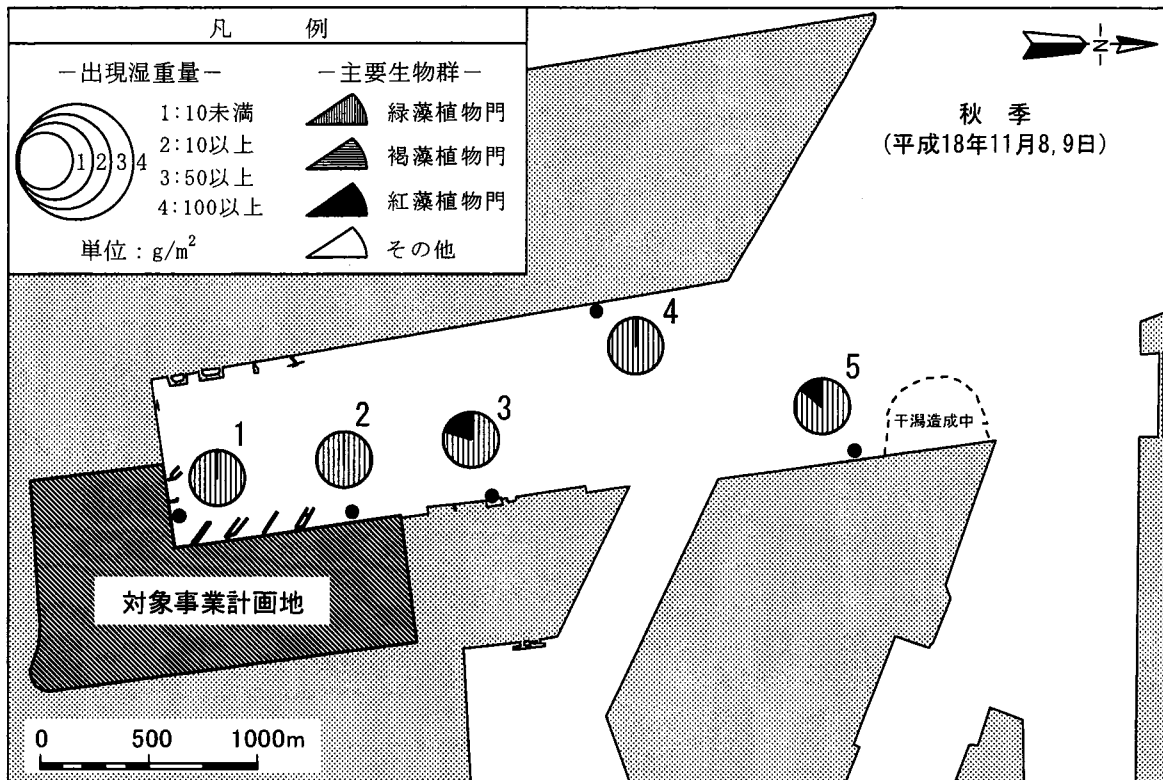


図6-7-1.9(2) 潮間帯生物(植物)の水平分布(粹取り調査)

6-7-2 影響予測

(1) 施設等の存在に伴う生息・生育環境の変化

① 底生生物の生息環境の変化の程度

ア 予測地域

栈橋計画水域とした。

イ 予測地点

予測地域と同じとした。

ウ 予測対象時期

施設完成後として、石油コークス用栈橋が完成した時期とした。

エ 予測方法

現況調査の結果を踏まえ、底生生物の生息環境の変化の程度を予測した。

オ 予測結果

栈橋計画水域で見られる底生生物の主な出現種は、ヨツバナスピオ（A型）、カタマガリギボシイソメ、シズクガイである。

栈橋計画水域では、基礎杭により杭面積相当の水底が部分的に消失することとなるが、当該水底に生息する底生生物は周辺海域に広く分布していることから、栈橋の存在が底生生物に与える影響はほとんどないと予測される。

カ 評価結果

予測結果を以下の評価の指針に照らして評価を行った。

- (1) 環境への影響を最小限にとどめるよう環境保全について配慮されていること。
- (2) 「環境基本計画」、「大阪府環境総合計画」、「自然環境の保全と回復に関する基本方針（大阪府）」に定める目標の達成と維持に支障を及ぼさないこと。

本事業では、深淺測量の結果、栈橋の設置に伴う水中工事（浚渫）については実施しないこととした。

栈橋の設計では既設栈橋と同様に、海水の流れを遮断しない透過構造とし、海底面の消失が小さい基礎杭構造を採用していることから、栈橋の設置による環境への影響を最小限にとどめるよう配慮されていると考える。

この配慮により、栈橋の存在が底生生物に与える影響はほとんどないと予測され、当該海域の底生生物の多様性の確保がなされていることから、「環境基本計画」、「大阪府環境総合計画」、「自然環境の保全と回復に関する基本方針（大阪府）」に定める目標の達成と維持に支障を及ぼさないと考える。

以上のことから、評価の指針を満足すると考える。

② 潮間帯生物の生息・生育環境の変化の程度

ア 予測地域

栈橋計画水域とした。

イ 予測地点

予測地域と同じとした。

ウ 予測対象時期

施設完成後として、石油コークス用栈橋が完成した時期とした。

エ 予測方法

現況調査の結果を踏まえ、潮間帯生物の生息・生育環境の変化の程度を予測した。

オ 予測結果

(7) 潮間帯生物（動物）

栈橋計画場所及び周辺の潮間帯生物（動物）の主な出現種は、ムラサキイガイ、コウロエンカワヒバリ、タテジマフジツボ、ドロクダムシ属等であり、既存資料調査結果から周辺海域にも広く分布していると考えられる。

栈橋の設置位置の護岸は存続され、潮間帯生物（動物）の生息基盤は消失しないことから、栈橋の存在が潮間帯生物（動物）に与える影響はないと予測される。

(イ) 潮間帯生物（植物）

栈橋計画場所及び周辺の潮間帯生物（植物）の主な出現種は、アオサ属、アオノリ属等であり、既存資料調査結果から周辺海域にも広く分布していると考えられる。

栈橋の設置位置の護岸は存続され、潮間帯生物（植物）の生育基盤は消失しないことから、栈橋の存在が潮間帯生物（植物）に与える影響はないと予測される。

カ 評価結果

予測結果を以下の評価の指針に照らして評価を行った。

- (1) 環境への影響を最小限にとどめるよう環境保全について配慮されていること。
- (2) 「環境基本計画」、「大阪府環境総合計画」、「自然環境の保全と回復に関する基本方針（大阪府）」に定める目標の達成と維持に支障を及ぼさないこと。

本事業では、栈橋の設計では既設栈橋と同様に、海水の流れを遮断しない透過構造を採用し、栈橋の設置にあたっては、海域生物の生息・生育する護岸の改変を回避することから、環境への影響を最小限にとどめるよう配慮されていると考える。

この配慮により、栈橋の存在が潮間帯生物（動物及び植物）に与える影響はないと予測され、当該海域の潮間帯生物（動物及び植物）の多様性の確保がなされていることから、「環境基本計画」、「大阪府環境総合計画」、「自然環境の保全と回復に関する基本方針（大阪府）」に定める目標の達成と維持に支障を及ぼさないと考える。

以上のことから、評価の指針を満足すると考える。